【研究ノート】

『万葉集』における格助詞「に」の用法分類

平河　明日香

一、はじめに

格助詞は、体言と用言の関係性を表すものである。すなわち、それらの関係性によって、格助詞はさまざまな意味的な用法を持つことになる。格助詞の「意味」とは格関係をあらわす際の機能的概念のことであり、格助詞そのものの意味ということではない。

体言と用言の関係性が多岐にわたるものとして「に」がある。通常「に」には、対象や場所など、数多くの意味用法があると考えられている（例えば、竹林（二〇〇七）、森田（二〇〇七）など）。ただ「に」の用法分類については先行研究が少なく、とくに上代にさかのぼって論じたものは管見では見られない。そこで、本稿では『万葉集』を使って格助詞「に」がどのような用法を持つのかを分析する。

本稿では、現代語の格助詞「に」の用法分類を示した菅井（二〇〇〇）を参考にしつつ、用例の解釈に基づいて用法分類した。また、格助詞「に」として使われている万葉仮名が判明しているものだけを調査対象とし、補読のものは対象外とした。（注一）

二、『万葉集』で使われている格助詞「に」の意味分類

『万葉集』の格助詞「に」の用法として、次の十五種類が確認できる。（注二）

1、存在点……人、ものが存在する場所を表す。（…に。…で。）
2、方向……ある基準から見た方向を表す。（…に。…の方に。…から。）
3、帰着点……動作の着点（場所、相手）を表す。（…に。）

4、密着点……動作の着点(切り離せないもの)を表す。(…に。)
5、相手……動作の相手(人物)を表す。(…に。)
6、対象……動作の対象(人物以外)を表す。(…に。)
7、変化の結果…変化の結果を表す。(…と。…に。)
8、目的……動作の目的を表す。(…のため(に)。)
9、原因……原因を表す。(…によって。…により。)
10、動作の主体……受身の時のその動作主を表す。(…によって。…から。)
11、時……時間を表す。(…に。)
12、比較の基準……比較の基準を表す。(…より。)
13、比況……比況を表す。(…のように。)
14、手段……手段を表す。(…で。)
15、資格……資格を表す。(…として。)

菅井(二〇〇〇)を参考にすれば、1「存在点」2「方向」3「帰着点」4「密着点」は「空間次元の用法」、5「相手」6「対象」7「変化の結果」8「目的」は「非空間次元の用法」、9「原因」10「動作の主体」11「時」は「奪格と交代する用法」である。また、菅井が設定していなかった用法として12「比較の基準」13「比況」14「手段」15「資格」が確認できる。私見によれば、9から15も非空間次元の用法であることから、本稿では、空間次元の用法、非空間次元の用法それぞの小分類として十五種類の用法を確認する。

三、空間次元の用法

『万葉集』で使用されている格助詞「に」の用法で最も多く確認できたものは「存在点」である。「方向」「帰着点」「密着点」も多く確認され、空間次元の用法は全体の七割近くを占める。(なお、場所に接続して「ある」「いる」など移動を伴わない存在をあらわす場合を「存在点」に分類し、東西南北や前後などの方角や向きに接続する場合は「方向」、「着く」「行く」などの動作主自身の移動、または動作主によって引き起こされた移動を伴う動詞に接続する場合は「帰着点」、動作の着点と移動するものが切り離せない動詞の場合は「密着点」とした。)

以下、用例の「に」には傍線、用言には波線を付し、円内の番号は巻番号、漢数字は歌番号を示している。

1、存在点

(1) ③〇三〇九

岩屋戸に　立てる松の木　汝を見れば　昔の

人を　相見るごとし

（2）⑩一八一三

巻向の　檜原に立てる　春霞　凡にし思はば　なづみ来めやも

（3）⑬三二九四

み雪降る　吉野の岳に　居る雲の　外に見しし　児に　恋ひ渡るかも

2、方向

（4）④〇五〇九

（長歌）天さがる　鄙の国辺に　直向かふ　淡路を過ぎ

（5）④〇五〇九

（長歌）粟島を　そがひに見つつ　朝凪に　水手の声呼び

（6）④〇六〇八

相思はぬ　人を思ふは　大寺の　餓鬼の後に　額つくごとし

3、帰着点

（7）③〇二八八

我が命し　ま幸くあらば　またも見む　志賀の大津に　寄する白波

（8）③〇三二七

わたつみの　沖に持ち行きて　放つとも　うれむそこれの　よみがへりなむ

（9）⑨一八〇四

遠つ国　黄泉の界に　延ふつたの　己が向き向き　天雲の　別れし行けば

4、密着点

（10）④〇七二九

玉ならば　手にも巻かむを　うつせみの　世の人なれば　手に巻き難し

（11）⑦一三三八

我がやどに　生ふる土針　心ゆも　思はぬ人

の　衣に摺らゆな

(12) ⑧一五五九

秋萩は　盛り過ぐるを　いたづらに　かざしに挿さず　帰りなむ

四、非空間次元の用法

非空間次元の用法で比較的多数見られたものは「相手」「対象」である。(なお、動作主に対する対象の中でも特に人物を「相手」、人物以外を「対象」に分類した。また、ある状態から変化した結果の状態に接続するものを「変化の結果」に分類したが「～になる」という変化の意味の強い動詞と接続することが多い。さらに、ある動作の目的となる事柄を「目的」に分類したが「～しに行く」という動詞に接続することが多い。ある行動、事態の原因となったもの、ことの場合は「原因」に分類した。「原因」に当てはまる例は全て「～ゆえに」が接続している。他に、受身形のときの動作の主体を表すものを「動作の主体」に分類した。「朝」「夕」「古」など時を表す単語に接続する場合は「時」に分類した。ある物事を比較する際の対象に接続するものを「比較の基準」に分類した。ある物事を別の物事にたとえているものを「比況」に分類した。動作をするときにどのような方法を使うかを表すものは「手段」に分類した。役割を表す語に接続し、「～として」という意味を表すものを「資格」に分類した。)

5、相手

(13) ③〇三六一

秋風の　寒き朝明を　佐農の岡　超ゆらむ君に　衣貸さましを

(14) ⑩二三四五

天霧らひ　降り来る雪の　消なめども　君に逢はむと　流らへ渡る

(15) ⑰三九七五

我が背子に　恋ひすべながり　葦垣の　外に嘆かふ　我し悲しも

6、対象

(16) ④〇六二三

松の葉に　月はゆつりぬ　もみち葉の　過ぐれや君が　逢はぬ夜の多き

(17) ⑤○八九四
残りたる　雪に交じれる　梅の花　早くな散
りそ　雪は消ぬとも

(18) ⑧一四三六
含めりと　言ひし梅が枝　今朝降りし　沫雪
にあひて　咲きぬらめかも

7、変化の結果

(19) ②○一○八
我を待つと　君が濡れけむ　あしひきの　山
のしづくに　ならましものを

(20) ③○三四三
なかなかに　人とあらずは　酒壺に　成りに
てしかも　酒に染みなむ

(21) ③○三三○
藤波の　花は盛りに　なりにけり　奈良の都
を　思ほすや君

8、目的

(22) ⑤○八○八
竜の馬を　我は求めむ　あをによし　奈良の
都に　来む人のたに

(23) ②○一七九
橘の　島の宮には　飽かねかも　佐田の岡辺
に　侍宿しに行く

(24) ②○一五八
山吹の　立ちよそひたる　山清水　汲みに行
かめど　道の知らなく

9、原因

(25) ②○一二二
大舟の　泊つる泊まりの　たゆたひに　物思
ひ痩せぬ　人の児ゆゑに

(26) ③○三○五
かくゆゑに　見じと言ふものを　楽浪の　旧
き都を　見せつつもとな

(27) ⑮三六一五

我が故に　妹嘆くらし　風速の　浦の沖辺に
霧たなびけり

10、動作の主体

(28) ④〇七七三

言問はぬ　木すらあぢさゐ　諸弟らが　練り
のむらとに　詐かれけり

(29) ⑧一六四一

沫雪に　降らえて咲ける　梅の花　君がり遣
らば　よそへてむかも

(30) ⑧一六四七

梅の花　枝にか散ると　見るまでに　風に乱
れて　雪そ降り来る

11、時

(31) ⑨一七九八

古に　妹と我が見し　ぬばたまの　黒牛潟を
見ればさぶしも

(32) ③〇三一五

天地と　長く久しく　万代に　変はらずあら
む　行幸の宮

(33) ④〇七四五

朝夕に　見む時さへや　我妹子が　見とも見
ぬごと　なほ恋しけむ

12、比較の基準

(34) ⑧一五〇三

我妹子が　家の垣内の　さ百合花　ゆりと言
へるは　否と言ふに似る

(35) ③〇四五一

人もなき　空しき家は　草枕　旅にまさりて
苦しかりけり

(36) ③〇三四五

価なき　宝といふとも　一杯の　濁れる酒に
あにまさめやも

13、比況

(37) ②〇一二五
橘の　影踏む道の　八衢に　物をそ思ふ　妹に逢はずして

(38) ②〇二三〇
道来る人の　泣く涙　小雨に降れば　白たへの　衣ひづちて

(39) ⑬三二八一
（長歌）我が衣手に　置く霜も　氷にさえ渡り　我や　にほひて居らむ

14、手段

(40) ⑨一七九二
我が恋ふる児を　玉釧　手に取り持ちて　まそ鏡　直目に見ねば

(41) ⑨一八〇三
語り継ぐ　からにもここだ　恋しきを　直目に見けむ　古壮士

(42) ⑯三八〇一
住吉の　岸野の榛に　にほふれど　にほはぬ

15、資格

(43) ②〇二三三
高円の　野辺の秋萩　な散りそね　君が形見に　見つつ偲はむ

(44) ⑦一三五七
たらちねの　母がその業る　桑すらに　願へば衣に　着るといふものを

(45) ⑬三三三九
（長歌）高山を　隔てに置きて

五、考察

前述のとおり、「に」の用法全体の七割は空間次元の用法であり、これが基本的で一般的な用法であったと推測できる。なお、格助詞「に」のプロトタイプは「着点」であるとする論が複数ある(注三)が、例えば「原因」は「ある物事の原因となった物事」のことなので「着点」よりも移

動の前を意味する「起点」の方がふさわしい。プロトタイプとされている「着点」と「起点」とは場所的な概念という点で一致しており、このような空間次元の概念が格助詞「に」の本質に関係があると考えられる。

全体を振り返るならば、「存在点」であれば「あるものが存在しえる場所」、「相手」であれば「動作主に対する相手になりえる人物」という範囲の縛りが必要である。移動の前後を問わない場所的な概念であること、かつ、ある範囲の制限のある概念であること、この二つのことを念頭に置くと、十五種類の用法の共通点として「ある範囲の中の一点」というものを指摘できる。ここで個々の用例について検討することはしないが、概ね、次のようなまとめができるのではないか。

・空間次元の用法

1、存在点……存在しうる場所の中のある一点という点
　↓用例（1）（2）（3）

2、方向　……様々な方向の中のある一つの方向という点
　↓用例（4）（5）（6）

3、帰着点……帰着点となりうる場所の中のある一点という点
　↓用例（7）（8）（9）

4、密着点……密着点となりうる場所の中のある一点という点
　↓用例（10）（11）（12）

・非空間次元の用法

5、相手　……動作主に対する相手になりえる人物の中から一人を選ぶ点
　↓用例（13）（14）（15）

6、対象　……動作主に対する対象となりえる物事の中から一つを選ぶ点
　↓用例（16）（17）（18）

7、変化の結果……数多くある中のものからあるひとつのものに変化するという点
　↓用例（19）（20）（21）

8、目的　……様々な事柄の中のあるひとつの目指す事柄をあらわす点
　↓用例（22）（23）（24）

9、原因　……「結果」に対する様々な事象の中の原因となったあるひとつの事象である点
　↓用例（25）（26）（27）

10、動作の主体……対象に影響を及ぼす可能性のある中のただひとつの主体という点

↓用例（28）（29）（30）

11、時　……「時の流れ」の中のある一点の時をあらわす点

↓用例（31）（32）（33）

12、比較の基準……数ある「比較の基準」となりえる物事の中からあるひとつの物事を選んだという点

↓用例（34）（35）（36）

13、比況　……数ある物事の中からあるひとつのたとえる物事を選んでいる点

↓用例（37）（38）（39）

14、手段　……手段となりうる方法、道具のなかのあるひとつのものという点

↓用例（40）（41）（42）

15、資格　……様々な役割の中で選ばれるただひとつの役割であるという点

↓用例（43）（44）（45）

このように「に」には「ある範囲の中の一点」という本質があることで、空間次元の用法と非空間次元の用法という世界の異なる用法が「に」によって実現できるのではないかと考える。

六、まとめ

最後に、ここまでの論点をまとめると、次のようになる。

一、『万葉集』における格助詞「に」の用法は大きく「空間次元の用法」と「非空間次元の用法」とに分けることができ、使用率の高い「空間次元の用法」が『万葉集』での格助詞「に」の基本的かつ一般的な用法であったと推察する。

二、「に」の「空間次元の用法」は「存在点」「方向」「帰着点」「密着点」の四種類に、「非空間次元の用法」は「相手」「対象」「変化の結果」「目的」「原因」「動作の主体」「時」「比較の基準」「比況」「手段」「資格」の十一種類に細分化でき、全十五種類の用法が確認できる。

三、『万葉集』における格助詞「に」の各用法には「ある範囲の中の一点」という概念上の共通性が見られる。

（注一）　西本願寺本である『完訳日本の古典　第2巻～第7巻　万葉集』の本文、訳を参考に分類した。

（注二）　他に「同じ動作を続けることで強調を表す用法」も確認できた。しかし、この用法は慣用句的な面が強いと判断

し、本稿では取り上げないこととした。参考までにその例を挙げる。

④〇七一四
ますらをと　思へる我や　かくばかり　みつれに
みつれ　片思をせむ

④〇七五一
相見ては　幾日も経ぬを　ここだくも　狂ひに狂
ひ　思ほゆるかも

⑥一〇一二
春されば　ををりにををり　うぐひすの　鳴く我
が山斎そ　止まず通はせ

（注三）現代語の指摘として、国広（一九八六）、堀川（一九八八）、菅井（二〇〇〇）、杉村（二〇〇二）。

参考文献

国広哲弥（一九八六）「意味論入門」『言語』vol.15-12
菅井三実（二〇〇〇）「格助詞「に」の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要　第2分冊　言語系教育・社会系教育・芸術系教育』
杉村泰（二〇〇二）「格助詞で終わる文について：「～を／が～に」構文と「～に～を」構文」『言葉の科学』（名古屋大学言語文化研究会）
竹林一志（二〇〇七）『「を」「に」の謎を解く』笠間書院
堀川智也（一九八八）「格助詞「ニ」の意味についての一試論」『東京大学言語学論集』88
森田良行（二〇〇七）『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版
日本語記述文法研究会（二〇〇九）『現代日本語文法2』くろしお出版